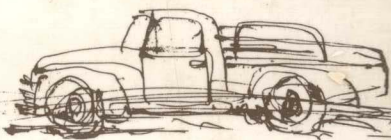


# あめりか物語

アーシャップ・ウオンテッド!! 明治末、アメリカに渡った姉と弟。激動する時代の嵐のなかを生きぬいた日系移民三代の愛と苦悩を、壮大なスケールで描いた傑作全四話。



yamada taichi

## 山田太一

作品集

7



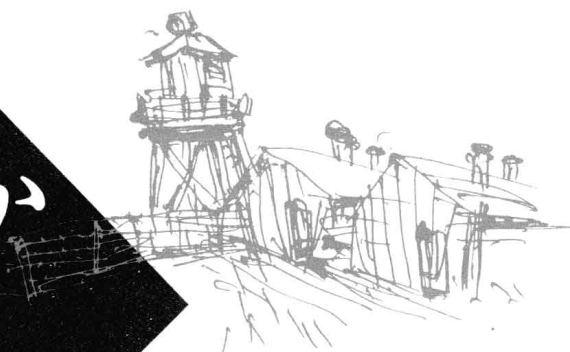
yama

# あめりか 物語

山田太一

作品集

7



大和書房

山田太一作品集—7

## あめりか物語

1985年12月30日 第一刷発行

著者—山田太一

発行者—大和岩雄

発行所—大和書房

東京都文京区関口1—33—4 〒112

電話番号(203)4511

振替 東京6—64227

印刷所—信毎書籍印刷

製本所—ナショナル製本

装幀—菊地信義

装画—田中靖夫

©1985 Taichi Yamada Printed in Japan

ISBN4-479-55007-0

落丁本・乱丁本はお取替します

山田太一  
作品集  
7



|      |       |
|------|-------|
| 目次   |       |
| 第一話  | ・ 5   |
| 第二話  | ・ 59  |
| 第三話  | ・ 107 |
| 第四話  | ・ 157 |
| あとがき | ・ 209 |



第一記

# 第一話

# あめりか物語・第一話

NHKテレビ

一九七九年一〇月一六日

## ●スタッフ

|    |       |
|----|-------|
| 企画 | 山本壮太  |
| 制作 | 小林 猛  |
|    | 藤田道郎  |
| 演出 | 清水 満  |
| 音楽 | 池部晋一郎 |
| 美術 | 斉藤博己  |
| 技術 | 杉村忠彦  |
| 効果 | 上田光生  |
| 編集 | 高室晃三郎 |
| 擬闘 | 林 邦史朗 |

## ●キャスト

|        |         |
|--------|---------|
| 菊地幸吉   | 北大路欣也   |
| 菊地良    | 十朱幸代    |
| 熊谷武平   | 西田敏行    |
|        | *       |
| 菊地紋    | 宝生あやこ   |
| ノブ     | 伊佐山ひろこ  |
| 移民官・野平 | ケーシー・高峰 |
| 通訳の老人  | 大森義夫    |
| 門脇源助   | 二見忠男    |
| 島木運助   | 長塚京三    |
|        | *       |
| 勝本律    | 八千草薫    |
| 勝本圭造   | 若山富三郎   |

●山村(昼)

雪。屋根。

スーパ―『一九〇五年十二月』

●道

村からの細道をおりて来る二人の女。良と紋。母娘である。先に歩く良は、行李風のトランク。紋は信玄袋を提げている。

スーパ―『山口県』

紋「歩きながら急にき上げるように不安がこみ上げ」  
ほんとじゃろうかネ? (と咳くようにいつて立止まり、  
前を行く良の後姿へ) ほんとじゃろうかいねえ、亜米利  
加がそねーな結構な国じゃちゅーんは」  
良「――(答えない。その不安は良のものでもある。今更  
いわれたくない。どんどんおりて行く)」

●谷川の道

紋「(小走りに歩きながら) 良」  
良「(どんどん歩いていく)」  
紋「(追いつながら) そねーに急がんでもええじゃろう」  
良「(そんな母にあたりたいような気持ちがこみ上げ、ペソ  
をかきそうなのを我慢してどんどん歩く)」

7—あめりか物語・第一話

次シーンの咳をする声、先行して。

●菊地家・囲炉裏部屋と土間

囲炉裏部屋の奥の蒲団に横になり、不精髭の良の父源  
三、力弱く咳込む。

良の兄幸太(25)が、濁酒どろ酒をのむ。

その妻イク(23)が、赤ん坊を背に縛って土間に立ち、  
半ばあいていた障子を音たててあげ、

イク「見送りに行ったらええでしょう! あてつけがまし  
ゆう酒なんかのんで。うちが小姑を追いついたようなこ  
とばつかしいうて! あんたじゃって、良ちゃ出て行っ  
て」

●山の小駅

雪の中で傘をさし、立っている紋と良。

イクの声「(前シーンと直結で) 金送ってくれりゃあ、こ  
ねーええこたあないでしょう!」

良「幸吉、とうとう帰ってこなかったねえ」

紋「姉あねさが亜米利加行くつちゅうのい、三日も四日も帰ら  
んで、何処におるんじゃか」

吏員の声「(次シーンの先行) 菊地幸吉」

● 県庁の旅券事務所

何処であるか分る必要はない。ベンチに両側から押されるように腰かけていた幸吉<sup>20</sup>「あ」と立ち上がり、幸吉「俺です(と明るく一礼)」

● 山の小駅

紋「荷物おろしたらええ」

良「それには反応せず、半ば自分にいい聞かせるように」  
庄屋の、若奥さまのようんって帰って来る」

紋「——ああ」

良「三年たったたら、必ず日本へ帰って事業をやるちゅうて来たし、様子だって」

● 熊谷武平の写真

洋服でなかなか堂々としている。

良の声「(前シーンと直結で) それほど悪かねえし、話半分としても」

● 山の小駅

良「(前シーンと直結で) 月に八十円は稼いじよる。二十円は送れる」

紋「——」

良「こころで嫁に行くより、どれだけええか分らん」

紋「——(こみ上げて来るが押さえる)」

良「写真だけでハワイへ行って嫁になるたあ、思うちよらんかったけど。フフ、フフ」

紋「仕方なあねえ(とベソをかくように泣く)」

汽車の警笛。

良「(その方を見て) 金儲けて、三年たったら帰って来る(と無理矢理明るく、息を大きく吸う)」

太平洋の波の音。

● 海

荒れた冬の海。波、高い。波音の中から音楽、湧きおこって——。

メイン・タイトル『あめりか物語』

● 三等船室

二段ベッドの大部屋。傾く船室。女の悲鳴。ころがる荷物。石油カンに吐く女。ベッドをささえる鉄柱にかまっている良。

これらを短く見せ——。

●月

クレジット・タイトル。揺れる月。

●三等船室

髪を乱し、手拭いで口を押さえた良。ベッドで、船酔いで苦しんでいる。

●食堂

中国人のコックが、列をなす日本人男女の手のベースン（食器、ボウル）に次々とチャプスイを入れながら、ベースンは両手で持ってくれないとこぼす、というようなことを甲高く叫んでいる。揺れる船。クレジット。

●三等船室

バクチをやる男たち。隅のベッドで蒼い顔で横になっている良。他にも蒼い顔の男女。笑っている女たちもいる。悪魔的に見える。

●船内通路（深夜）

コーターマスター（詰襟、ツバあり帽子）が、目玉ランプで見回っている。

## アメリカ移民の始まり

一八六八（明治元年）、一五三人の出稼人がアメリカ人ヴァン・リードの手でハワイに渡航した。印紳纏に股引、ちゃんまげ頭に饅頭笠のこのグループが、後に「元年者」と呼ばれ、「二ヶ月二六日間労働で賃金四ドル。三ヶ年契約」の最初のハワイ移民となった。

翌一八六九年（明治二年）サンフランシスコの「デーリー・アルタ紙」は、オランダ人ともドイツ人ともいわれるヘンリー・シュネルが、会津若松の人々とともにカリフォルニア州、エル・ドラドに入植したと報じている。しかしこの会津若松移民団は数年で失敗、離散して今はただその地ゴード・ヒルに、病死した一行中の娘「おけい」の墓が残され、アメリカ本土最初の日本人移民の地として州の史蹟に指定されている。

その後、ハワイへの移民は一時的な中断と、移民形態の変化（政府間のとりきめによる官約移民から私的移民へ）はあったが、順調に伸び続け、一九〇六年（明治三九年）の年間旅券発給数三〇、三九三名でピークを迎える。一方、アメリカ本土では、一九〇〇年（明治三十三年）以降、ハワイからより高い賃金を求める日本人が続々とカリフォルニアへ転航し始め、果樹農園労働と鉄道労働を中心とした在米日本人社会が形成されてゆく。

## ●三等船室

てんでな姿で眠っている人々。目をあいている良。  
船室内は、細くしたランプ一つ。

## ●海（昼）

## ●ウエル・テッキ

風が激しい。顔をあげられず、掴まりながら歩いて来る男がいる。投げ出されそうになって、慌てて何かに掴まる。波。幸吉である。

## ●三等船室

ノブ(20)が、「菊地良っちゆう人、おっとね？」と掴まりながら部屋に行く。「菊地良っちゆう人、おらんとね？」

良「あ（と身体起こす）」

ノブ「（気がつかず）菊地良っちゆう人たい（大声）」

## ●船内通路

ノブ「（身体をささえながら）あっちだ（と一方を指す）」  
良「（そのノブにぶつかるように現われ）ありがと（その方を見る）」

## ●デッキへ出るドアの前

幸吉「（振りかえって）姉<sup>おえ</sup>さ（と微笑して目を伏せる）」  
良「（ややはなれて身体をささえながら）幸吉（呆然とする）」

幸吉「（くると窓の方を見てしまう）」

良「なして？ なしてこの船乗っちゃうん？（近づき）ハワイへ行く船（なぜ？）」

幸吉「亜米利加、バックにええところしいけえ、俺も行きたうなった」

良「（ハッとして）密航——？」

幸吉「んにゃ、借金じゃ」

良「借金で、誰に借金したん？」

幸吉「亜米利加行くんじゃ。姉さ。金はいくらでも儲からうが（と明るくパッと微笑）」

## ●海（昼）

やはり荒れている。

クレジット・タイトル終る。

## ●現在のホノルル港

現実音も入れて、海から見た岸壁。  
スーパー『現在のホノルル港』

●ウエル・デッキ

日本人男女、はじめて見るハワイをあまり表情なく見ている。静止せず動く人々も背後にいる。前シーンの音、短くずれ込んで、一九〇五年の音になる。鳥の声など。

ノブ「(不安な小声で) 迎えに来とるね? あんたの(良に聞く)」

●岸壁

異物を見るような目で、船の日本人たちを見ている数人の労働者風の白人。中国人。

良の声「よう分らん」

●ウエル・デッキ

ノブ「(手にした写真を見、また岸壁を見て) うちのは、土木会社の社長だけエ」

●ノブの結婚相手の写真

モーニング姿の立派な男。

ノブの声「自分じゃ迎えに来んのだろうか?」

## 出稼ぎ

初期の移民が出稼者とよばれ、一時的に海外で働いて金を稼ぎ故郷に帰る——錦衣帰朝——を目的としたものであることは、一八九三年(明治二六年)に広島県知事から、同県出身の移住者に与えた次の告諭にもよくあらわれている。

「広島県民布哇出稼者に告ぐ。茲に出稼者は最愛なる父母妻子に離れ三千里の波濤を蹶え遠く彼の国に赴くものにして其の目的は皆金銭を儲蓄し他日故郷に帰り安穩に世を渡らんとするに外ならず今此金銭を得んと欲せば専ら品行を方正に身体を健康にし日本の臣民たることを忘れず能く彼の国の規則を遵守せよ。……云々。

広島県知事從三位勲二等

鍋島 幹

彼らの日本への送金額も明治二十七年には四六万ドルにのぼり、当時の日本経済にとつてもばかにならない額であった。彼ら出稼者が帰国の夢をすてハワイに定住し結婚して、やがて二世の進出を見るのはまだまだ後のことである。

●ウエル・デッキ

良「どねえなもんじゃろうか」

ノブ「岸壁に目をこらしながら」あんとこは、トウキ  
ビ会社のマネージャーだったね？」

良「うん（あとはOFFになり、他の女たちが写真を見て  
は岸壁を見ている姿にかかる）迎えに出ちよると手紙に  
ゃあ書いてあったけど」

女たちの背後を幸吉が良の方へ行く。

幸吉「姉<sup>やま</sup>さ」

良「うん？」

幸吉「岸壁にゃあ、迎えのもんは入れんそうじゃ」

ノブ「何処におるん？」

●移民局の前

幸吉の声「（前シーンと直結で）移民局の前で、あんたら  
が出てくるんを待っちゃるそうじゃ」

日本人の男たち。一応身綺麗な服装。

卑猥に二人で低く笑っている男。

生真面目な顔の青年。落ちつかず、立上がり、くると  
背を向ける中年男。無言で、興奮からか、とっ組み合  
いのじゃれ合いをしている男二人など、幸吉のOFF  
の声が終っても見せたい。

●移民局・廊下

岸壁に面したドアを白人の大男が音をたててあけて、  
中へ入り、振りかえって、

TALL MAN: Come on in and turn left. (becom-  
ing irritated) I said come in and turn left!  
Come on, come on; What are you waiting for?  
(because no one follows, he shouts waving his  
arms) Hey you. Come in here!

〈大男「中へ入って左だ（すぐら立って）中へ入って左だ。な  
にをしている（入って来ないので大声ではじめて手振りを入れ  
て）中へ入るんだ！〉

最初の日本人（男）「（入って来る）」

TALL MAN: (grabbing the man by the shoulder,  
pushes him in the direction of the corridor) Go  
on, go on. Get going. (Pushes the next man on  
the shoulder and hurries the one next to him.)  
Don't leave spaces between you! And don't  
look sideways.

〈大男「（その肩を掴み、廊下へ行くように押しやりながら）どん  
どん行け、ぐずぐずするな（と次の男の肩を押し、次の男をせ  
かし）間をあけるな。キョロキョロするんじゃない〉

家畜のように続く日本人男女。廊下のつきあたりで別

の白人がわめく。

ANOTHER WHITE MAN: Turn right, down there. I said turn right, down there!

△別の白人「この先の右へ入れ、この先の右だ」△

TALL MAN: (shouting as though to round up cattle) I told you not to leave spaces between you. Hey, whattaya doing? Go on, go on. Keep on moving.

△大男「大声で、家畜を追いたてるように」間をあけるなどっているだろう。なにをしている! どんどん行くん、どんどんだ」△

絶え間なく二人の白人のどちらかが叫んでいて――。

#### ●移民局大部屋

奥のドアがあいて前シーンの白人より知的印象の白人が入って来る。

続いて日本人の移民官野平が続く。

小声でガヤついている日本人たち、白人が黙って立つので静かになって行く。

野平「Silence! You must be quiet! 静粛! 静かにしなければいけない(日本人に嫌悪と同胞意識が共にある)本官は、当移民局の野平移民官である。只今から入国検査を行う。十二指腸虫検査、トラホーム検査、梅

#### 移民の文盲率 (1889~1910年)

|            |       |
|------------|-------|
| ポルトガル人     | 68.2% |
| メキシコ人      | 57.2  |
| 南イタリア人     | 53.9  |
| 小ロシア人      | 53.4  |
| インド人       | 47.2  |
| ユダヤ人       | 26.0  |
| 日本人        | 24.6  |
| 北イタリア人     | 11.5  |
| 中国人        | 7.0   |
| フランス人      | 6.3   |
| ドイツ人       | 5.2   |
| オランダ・ベルギー人 | 4.4   |
| フィンランド人    | 1.3   |
| イングランド人    | 1.0   |
| スカンジナビア人   | 0.4   |

#### ハワイ日本人人口の動き

|            |         |
|------------|---------|
| 明治元年(1868) | 153人    |
| 18年(1885)  | 2,039   |
| 20年(1887)  | 3,589   |
| 25年(1892)  | 19,482  |
| 30年(1897)  | 26,476  |
| 33年(1900)  | 61,111  |
| 35年(1902)  | 64,928  |
| 38年(1905)  | 59,956  |
| 40年(1907)  | 86,740  |
| 44年(1911)  | 79,788  |
| 大正元年(1912) | 80,366  |
| 5年(1916)   | 97,000  |
| 10年(1921)  | 114,879 |
| 昭和元年(1926) | 129,901 |
| 5年(1930)   | 139,631 |
| 10年(1935)  | 148,972 |
| 15年(1940)  | 156,849 |
| 27年(1951)  | 186,025 |

#### ハワイ在住日本人県別人口 1924年(大正13年)

|     |         |
|-----|---------|
| 広島  | 30,534  |
| 山口  | 25,878  |
| 熊本  | 19,551  |
| 沖縄  | 165,128 |
| 福岡  | 7,563   |
| 新潟  | 5,036   |
| 福島  | 4,936   |
| 和歌山 | 1,124   |
| 宮城  | 1,088   |
| 岡山  | 727     |
| 山梨  | 581     |
| 愛媛  | 538     |
| 静岡  | 487     |
| 東京  | 461     |

毒検査、知能検査である。もしお前たちの中に一人でも病人があれば、全員検査所送りとなり、全員日本へ送還ということもあり得る」

さすがに、低くガヤガヤとする。

野平「Silence！ 静粛！ 静粛に！（静かになったのを見て）写真によって入籍し、当地へ来た女共は、窓際に集合せい！」

良「（横の幸吉を見る。不安がこみあげる）」

幸吉「ああ（行くんだな、とうなずく）」

野平の声「直ちに動け。命令されたら、直ちに行動せんと一日ではすまんぞ」

良「外の何処でおおたらええんかねえ」

野平「早うせい、早う」

ノブ「（良の手をひき）早くて」

幸吉「何処でも逢える」

良「ああ（ひかれて行く）」

野平「早うせんかい！ 日本人はだらしのうて、汚うてくそうて黄色くて小さくて野蠻人だと思われとるぞ！ 思われんようにせい！ 思われんようにせい！」

#### ●トラホーム検査

上半身裸体の男たちが白人の医師に目をむかれている。幸吉もいる。

#### ●別の一室

一所懸命、ひとりの女性が、紙を見て読んでいる。

女A「アナタガジガヨメルカヨメナイカチャイトヤサシイシケンヲシマス」

野平「（顔をよせ）どういう意味か分つとるな」

女A「いえ（とおびえてかぶりを振る）」

野平「分らんことないだろうが。読んだじゃねえか。自分でいま読んだろうが！」

#### ●同じ部屋

女B「（読んでいる）ちよいと——」

野平「そうだ」

女B「ちよいと——ちよいと」

野平「次を読まねえか」

女B「且（まだ）さんが、怒鳴りなさるけエ、うちは頭がカーツとなつて」

#### ●同じ部屋

良「（一所懸命読んでいる）ジヲ、ヨメルカ、ヨメナイカ、

チャイト（すぐ）チャイト（せき込むように読む）」

野平「うん（と大きくうなずく）」

良「ヤサシイ、シケンヲシマス」